

図書館の利用者として

経済学部 大日方 成光

私は、私事情で経済学を中心とした学問を身につける必要性があることから、図書館（豊橋校舎）を頻繁に利用させていただいているが、愛知大学の図書館には、数多くの書籍や資料、そして設備が整っており、本当に満足している。

授業期間中の開館時間帯は21時30分までであり、下宿生活をしている私にとっては、一度帰宅をして、夕食を済ませてから、また図書館へ行くという生活を続けることが可能である。特に私は、時間を忘れて勉学や書物に没頭することができる夜間の時間帯が好きである。また、テストのある月においては、日曜日も開館していただくなど、大学や職員の方に対して本当にありがたいと思っている。愛知大学の図書館には、大学生が思い切り勉学ができる環境が整っているため、利用しなければ本当に損だと思う。

ただ、図書館に対して一つだけ要望がある。それは、テスト期間中に限って図書館に増加する騒がしい学生を何とかしてほしいということである。これは、私のみならず、普段から図書館を利用させていただいている友人達の切なる要望でもある。同期間中は、テスト対策のために騒がしい学生が増え、飲食はする、騒ぐ、電話をするなど、普段は静寂な図書館が、動物園化する。私は当初、それらの学生に注意をしていたものの、きりがないので止めてしまった。

普段から、図書館には勉学に励んでいる学生が数多くいる。彼らが、疎外されることのないよう、周囲に迷惑を掛ける学生には、ペナルティーを課す等、なんらかの手段を講じて欲しいと思うし、そうするべきだと思う。私の大学生活は残り僅かであるが、それまでに図書館を精一杯利用させて頂きたいと思っている。

本から得られるもの

経営学部 松下 晃久

子供の頃から、本を読むことが大好きだった。多くの本が所蔵されている図書館は、とても魅力的な空間である。自分にとって、図書館に足を運ぶことは非日常的な幸せを感じる瞬間でもある。図書館特有の空気と言うものが好きで本を借りる、勉強すると言った明確な目的がない時でもその中に身を置きたくなる。図書館の空気は共有している人達で作られるものであり試験前など混雑する時期は、普段は閑散としたのどかな雰囲気が一変する。一人一人の意識や世界は交わることはないが、空間の共有という感覚はある。

いつの頃からか活字離れが問題になっているがどうして文字媒体の利用率が下がったのであろうか？よくインターネットの発達と耳にする。確かに、急速な進展による多様化には目を見張るものがあるが理由はそれだけだろうか？改めて本を読むことの素晴らしさを考えてみてほしい。本を読むことは、豊かな人生観を形成し、将来の選択肢が増えることに繋がると思う。知識は壁にぶつかった時、方向性が分からなかった時に解決のツールにもなる。

本学の図書館は開架方式を採用している。十分な蔵書はもちろん誰にでも等しく利用機会が与えられ、時間や場所を問わず OPAC も検索、利用できる知の宝庫である。開架方式のメリットも生かし、膨大な蔵書の中からお目当ての一冊だけに目を向けるのではなく、その隣や周辺にも目を向けて見てもおもしろいと思う。なぜなら、手に取って読んでみたらすぐ隣が本当のお目当ての一冊かもしれない。もし検索して読みたい本がないようであれば、購入希望図書として申請すれば図書館に置いて貰える。是非多くの本を読み、学んで、知的好奇心を刺激してほしい。そして、充実した学生生活を送ってほしいと心から思う。